

## フリードリヒ・デュレンマットにおける合理主義と非合理主義

浅見 昇吾\*

---

本稿の目的は、フリードリヒ・デュレンマットの解釈に対する新しい枠組みを提示することである。最初に、これまでの解釈が合理主義的な解釈と非合理主義的な解釈に大きく分裂していることを示す。次に、双方の解釈に問題点があることを明らかにする。その後、「方法論的合理主義」とでも言うべき枠組みを使えば、合理主義的解釈と非合理主義的解釈を統一的に捉えることができることを提示する。最後に、ある種の言語哲学の立場を考慮に入れば、相対立する解釈のみならず、デュレンマットの著作活動をも統一的に捉えることができることを明らかにしたい。

キーワード：デュレンマット、合理主義、非合理主義、方法論的合理主義、*Richter und sein Henker*

---

### はじめに

「天才」ともたたえられた<sup>1</sup>フリードリヒ・デュレンマットの作品は膨大な数に及ぶ。その作品群の中でデュレンマットは科学者の良心、権力のあり方、集団の責任等、今でも大きな問題となるテーマを追求している。ということは、デュレンマットの作品群はアクチュアリティを失っていないと言えるだろう。それゆえ、デュレンマット解釈の状況を概観したうえで、新たなデュレンマット解釈の手がかりを示すことは、今でも意味のあることだろう。

最初に、これまでのデュレンマット解釈が二つの異なる方向に分裂していることを確認したい。次に、二つの解釈に問題があることを指摘する。その後、二つの正反対の解釈を統一的に理解するための枠組みを提示し、二つの解釈がその枠組みの中でなら相応の位置を占めることができることを示したい。最後に、ある種の言語哲学を考慮に入れることで、上記のデュレンマット解釈の枠組みを若干広げ、デュレンマットの作品のみならず、デュレンマットの作家としての活動をも統一的

---

\* 東洋大学人間科学総合研究所客員研究員

に捉えられることを明らかにしたい。

なお、デュレンマットを解釈するといっても、彼の作品を網羅的にとり上げることは到底できない。そのため、ここでは推理小説、特に *Richter und sein Henker* を中心に議論を進めたい。デュレンマットの名を世界に知らしめたのは、*Richter und sein Henker* であるとともに、この作品には二冊の続編 (*Verdacht, Versprechen*) が書かれ、主人公ベルラッハはデュレンマットの作品群のなかできわめて重要な位置を占める登場人物だからである。また、この作品の解釈については、推理小説というジャンルの限界と関連付けられながら、文学者のみならず哲学者まで加わり、激しい論争が繰り返り広げられているので<sup>2</sup>、この作品を参照することで、デュレンマットを的思想を的確に捉えることができると思われるからである。

## 1 デュレンマット解釈の分裂

デュレンマットは *Richter und sein Henker* 等の推理小説を通じて、自らの思想や世界観を提示していくが、推理小説とはどのようなものだろう。

シャーロック・ホームズ・シリーズ等の伝統的な推理小説では、探偵と犯人が善なる側面と悪しき側面を代表し、最後には善なる探偵が悪を滅ぼし、善なる秩序ないし正義の秩序を復活させることが多い。しかも、探偵は何らかの手がかりから理性的な推論を用いて、犯人を発見する。したがって、通常の推理小説、伝統的な推理小説では、世界は、人間が理解できるものであり、理性によって解き明かせるものだと捉えられていることになる。そこには、偶然が入り込む余地は少ないことにもなる。換言すれば、合理主義的な世界観ないし信念が伝統的な推理小説の根幹にあると思われる。

では、*Richter und sein Henker* もそのような通常の推理小説の枠に収まるのだろうか。デュレンマットも理性主義を説いているのだろうか。

外面的な枠組みやあらすじを追う限りでは、少なくとも一見したところでは、通常の推理小説のスタイルの条件を満たしているように見える。最初に殺人事件があり、シュミートという一人の警察官の死体が発見される。その後、死者の上司でもあるベルラッハ警部が登場し、チャンツという警官を助手にする。そして探偵役がいろいろ考え、助手役が具体的な捜査を進め、証拠を集め、最後にベルラッハは犯人を突き止め、必要な証明を行う。この筋を見る限りでは、すべて通常の推理小説の枠内に収まるといって過言ではない。犯人が助手役のチャンツだったということだけが、通常の推理小説の枠組みと矛盾するかもしれない。上記のように、伝統的な推理小説では、善なる側と悪しき側がはっきりと区別されることが普通だったからである。とはいえ、チャンツが犯人だという結末は、常に新しい意外な結末を求めることから生じたことで、*Richter und sein Henker* の作品自体は、伝統的な推理小説の枠内に収まっているとも考えられる。ホームズ役が理性的な手段や推論を用いて犯人にたどり着いている。しかも、犯人の動機は卑しいものとはいえ、まだ通常の人間が理解できるものであった。それゆえ、まだ合理的な土台の上で話が展開している。ここまでの話

を見る限りでは、*Richter und sein Henker* は推理小説の枠内に収まるだろう。

しかし、合理的な土台に基づくこの筋と複雑に絡み合っているもう一つの筋が、この作品にはある。それは、ベルラッハと宿敵ガストマンとの関係である。ガストマンはシュミット殺害の犯人ではないが、*Richter und sein Henker* で重要な役割を演じている。ベルラッハとガストマンの関係で重要なのは、二人が行った賭けであり、それが二人の人生を決定づけることになる。この賭けで問題になっているのは、人間の世界における偶然性である。ベルラッハによれば、この世界には偶然性が大きな力を持つがゆえに、いかなる犯罪も最後には露見する。ところが、ガストマンによれば、この世の偶然性のゆえに、人知れず殺人等の犯罪をおかすことができるという。そして、ガストマンは、ベルラッハが自分の犯罪を証明できないような形で、ベルラッハのいるところで犯罪を行う、と請け合うのである。

二人の賭けでは、世界が偶然的なものであることを出発点にしているので、ここで非合理的な世界に入り込むとも言える。が、もし警察官のベルラッハ、つまり秩序側の人間が、合理的な方法でガストマンの犯罪を暴くことができれば、この世界には何らかの秩序が支配しているという（最小限の）期待を持つことができる。ところが、気の赴くままに犯罪を行うガストマンが、勝利し続ける。犯罪は露見せず、ガストマンは犯罪を続けていく。それゆえ、世界の秩序への期待を捨て去ることを強く促されることになる。ベルラッハが最後に不当な方法を用いて、チャンツをガストマンに仕向け、ガストマンを殺させるというのも、この世界には合理的な秩序を期待することはできないということを示唆している。何しろ、不当な方法で正しいことが実現されるのである。したがって、我々は非合理的な世界、グロテスクな世界に住んでいることになり、この世界を支配しているのは偶然性だということになる。これが、*Richter und sein Henker* の結論だとも見えるのである。

このような偶然性の重視は、*Richter und sein Henker* のみならず、他の作品にも見られる。*Panne* を見ても、偶然故障にあったセールスマンが主人公となっている。しかもデュレンマットは、ラジオドラマと小説バージョンで結末を変えている。つまり、デュレンマットにとっては、話の結末も合理的で必然的なものではないのである。*Versprechen* でも同様である。小説バージョンでは、最後に偶然が主人公の努力を台無しにしてしまう。このような例は枚挙にいとまがない。

要するに、デュレンマットは、世界が偶然性に満ちており、世界は混沌としたものだ、と強く主張していることになる。これは一種の合理主義への訣別だと言えるだろう。特に、理性と秩序の世界であるはずの推理小説の枠組みの中で、このような偶然性と混沌を浮かび上がらせている以上、デュレンマットは合理主義への訣別をはっきりと宣言していると考えerことは無理からぬところである。それゆえ、デュレンマットの思想を非合理主義として解釈するのは、ある意味できわめて自然なことだと思われる。ここに、デュレンマット解釈の一本の柱を見て取ることができるのである<sup>3</sup>。

しかし、他方でまったく別のデュレンマット解釈がある。デュレンマットの作品にある種のオプティミズムを見る解釈者たちがいるのである<sup>4</sup>。主人公は最後に恩寵を受けているのではないかと

いう。なるほど、このような解釈を許す要素がないとはいえない。*Richter und sein Henker*のベルラッハは一面では、偶然に助けられ、殺人事件の犯人を示す証拠を手に入れる。偶然に助けられたとは、ある意味で神の恩寵だと解釈できないこともない。またベルラッハは、最後には、宿敵を滅ぼすことに成功する。今まで失敗してきたことが最後に成功したのを神の恩寵の証だと考えることもできるだろう。そればかりではない。すぐに思いつくように、ベルラッハをゲーテのファウストになぞらえることもできるだろう。ベルラッハとガストマンの賭け（道徳的とはいえない賭け）をファウストとメフィストフェレスの契約にたとえるのである。ベルラッハの必死の努力も、ファウストの努力にたとえられるだろう。ベルラッハが最後にガストマンを葬ることに成功したのも、ファウストの努力の成果だと言えないこともない。しかも、*Richter und sein Henker*の続編として書かれた*Verdacht*で、ベルラッハは命を落とすことが免れ得ないと思われた最後の瞬間に、救い出される。そして、最後に安らかな死を迎える。これを恩寵と見ることも不可能ではないだろう。したがって、道徳的でない契約を結んでも、努力を積み重ねることで、罪が贖われ、救いと恩寵が支配することが謳われている、とも考えられるのである。この解釈の方向を取れば、最後には正しい秩序、合理的な秩序が回復すると考えることができる。つまり、世界を合理的に理解できる余地が残ることになる。デュレンマットの世界を合理主義的に解釈することも不可能ではないのである。

## 2 二つの解釈の問題点

このように、デュレンマットをまったく別の方向で捉えようとする解釈が横行している。しかし、どちらの解釈もデュレンマットの一面のみに光を当てているように思われる。

まず、デュレンマットの中にオプティミズムや神の恩寵の証を見る解釈者たちに疑念を呈しなくてはならない。例えば、*Richter und sein Henker*のベルラッハは、最後にガストマンを葬るが、実際に行っていない犯罪でガストマンを葬ろうとしている。しかも、別の人間を絶望に駆り立て、ガストマンを殺害するように仕向けている。明らかに道徳に反し正義に適わない行動がとられている。他に選択肢がなかったのは確かであろうが、この行為を神の恩寵と表現することはできないように思われる。次に、ベルラッハをファウストにたとえるのにも無理なところがある。ファウストは最後に、人間が力を合わせて努力する光景を見て、そこに最高の喜びを感じている。ベルラッハは最後にそのような肯定的な価値を見出してはいない。推理小説以外のデュレンマットの作品を見れば、なおさらオプティミスティックな解釈に疑念を挟みたくなるだろう。*Physiker*では、最後に天才科学者の努力が無に帰し、科学者は狂気に陥ってしまう。*Besuch der alten Dame*では、正義と理想の名のもとに行われる一種の集団殺人が描かれている。恩寵が舞い下りてきているようには見えない。それゆえ、やはりデュレンマットが世界の偶然性や恣意性を強調していることは確かなように思われる。世界には人間の予測を超える部分があるということが、デュレンマットの根本テーゼであることは間違いないのではないだろうか。

しかし、他方で、デュレンマットを単純に非合理的なものをたたえている思想家と捉えることも

できないように思われる。*Richter und sein Henker*でも、ベルラッハはすべてを偶然に任せきりにしていない。ガストマンを捕らえる努力を最後まで続けていく。単純に非合理的なものをたたえるだけなら、ベルラッハのような行動はとらなかつたに違いない。*Physiker*の後書きの二一箇条を見ても、万人に関係する事柄を一人の力で解決しようとしても、それは必ず挫折すると説きながら（18条）、物理学の作用はすべての人間に関わると言い（16条）、すべての人間に関係のあるものはすべての人間によってのみ解決できる（17条）と主張されている。ここには、明らかにデュレンマットの肯定的で積極的な側面が見て取れる。そもそも、もしデュレンマットの根本的な主張が偶然や非合理的なものに身を任せることにあるのなら、デュレンマットが夥しい数の作品を書いて、様々な道徳的問題や社会的問題を扱ってきた理由がわからなくなるだろう。個々の問題にデュレンマットがどのような態度をとっているにせよ、単に偶然に身を任せ非合理的なものをたたえているということはない。デュレンマットが、現実の様々な問題の本質に迫ろうとしていたことを否定することはできない。デュレンマットは、偶然に身を任せた振る舞いをしているわけではないのである。

とするなら、デュレンマットを神の恩寵を信じる単純なオプティミストと見ることもできなければ、世界の偶然性や不可解さに単純に身を任せている作家と見ることもできないことになる。デュレンマットの二つの側面、ないしは二つのデュレンマット解釈を統一する視点が必要になってくるのである。

### 3 新しい解釈の枠組みとしての方法論的合理主義

ここで最初に指摘したいのは、二つのデュレンマット解釈、特にデュレンマットの考え方を非合理主義的と見なす人々に、共通の考え方が潜んでいるように思われることである。それは、合理主義に対する古典的な見方に他ならない。理性主義、合理主義の古典的な捉え方によれば、世界自体が理性的な構造を持っていることになっている。それを、人間の理性、いうなれば主観的理性ないしは理性の主観的側面が認識するという構図になっている。世界自体が理性的でないなら、どうして理性的な認識や合理的な思考活動が可能だろうか、というわけである。理性の主観的側面と客観的側面の一致がなければ、認識などそもそも不可能だという立場だとも言えよう。この構図は哲学史（の一面）を貫くものだったと言えるだろう。

しかし、理性は客観的なもので、世界は合理的なものである場合にのみ理性的認識、理性主義が可能だということは確かなのだろうか。他の合理主義の可能性は絶対的に排除されているのだろうか。そうではないように思われる。伝統的な強い理性主義をとらなくとも、弱い理性主義ないし合理主義が可能だと思われるのである。例えば、「方法論的合理主義<sup>5</sup>」のようなものが可能であろう。これは、世界自体があますことなく合理的であることを前提にしない立場である。また、逆に世界が完全に非合理的な世界であると主張しているわけでもない。世界の中には合理的な部分もあるだろうが、非合理的な部分もあって、人間の理性や認識の営みでは世界を完全には捉え切れないかもしれないと考えるのである。この立場は人間の認識能力のすべてを否定しているわけではない。が、



世界の理性的構造と、人間の認識の能力とが、完全に対応し調和しているということをはじめから前提にはしないのである。人間の認識能力では捉え切れないものがあるかもしれない、と言っているのである。人間の認識能力で捉え切れないものを非合理的なものと呼ぶなら、この立場は非合理的なもの存在を否定しない。その限りで、非合理主義の要素を持っていると言ってもよい。けれども、この立場では人間は非合理的なものに身を任せるのではなく、非合理的なものに立ち向かおうとするのである。ある意味で、合理的なものを探っていくことになる。そのため、この立場を通常の非合理主義と同一視することはできないように思われる。あるいは、非合理主義という考え方にも幾つかの種類があるという言い方ができるかもしれない。まず、世界自体や人間自身が非合理的なもので、合理的な認識はまったく不可能であるという立場があるだろう。このような立場からすれば、人間は非合理的なものの力に身を任せるほかないかもしれない。しかし例えば、世界自体や人間の中に非合理的なものがあっても、世界を合理的に捉えようとすることは可能だという立場もあるだろう。このような態度は非合理主義の一種というより、方法論的合理主義といった言葉で特徴づけるのがよいのではないだろうか。

次に、このような方法論的合理主義の立場をとった場合、理性とはどのようなものになるだろう。ここでは議論を詳しく展開することはできないが、この場合理性は一つの完全に自己充足したものではなくなるだろう。世界と主観的理性とは一つの完全な調和を実現できなくなるからである。それゆえ、理性はかなり弱いものとなるに違いない。現代哲学の中にも、理性をそのようなものとして捉える立場がある。理性を生に奉仕するだけのものとしたり、理性を多元的なものとして捉え、複数のそれぞれの生活形態の中にそれぞれ独自の合理性を認めようとしたりする傾向もある。理性は、伝統的な捉え方よりもかなり従属的な地位を占めるかのように見えるのである。しかし、ここでは新たな理性概念を提出して詳しく分析すること自体が目的となっているのではない。方法論的合理主義という枠組みを提出することで、*Richter und sein Henker*、そしてデュレンマットに関する新たな解釈を提示することが主眼である。

さて、方法論的合理主義という概念を得た今、*Richter und sein Henker* のベルラッハを見てみると、その行動がよく理解できるように思われる。ベルラッハは世界が偶然に満ちていることを、つまり、世界が人間の理性で完全に捉え切れないことを認めている。この意味では、ベルラッハは非合理的なものの力を認めていると言える。しかし、非合理的なものに身を完全に委ねているわけではない。ガストマンの犯罪を証明しようと努力している。最後にベルラッハは道徳や正義に合わない手段をとるが、方法論的合理主義の立場からすれば、理性は自己充足したものではなく、(非合理的なもののような)「理性の他者<sup>6</sup>」というべきものに従属することも考えられるわけだから、ベルラッハの行動を理解することもできることになる。もちろん、このことはベルラッハの行動が道徳的に是認できるということを意味しない。方法論的合理主義の立場から見ると、ベルラッハの行動をよく理解できる。このことを主張しているにすぎない。

ベルラッハとガストマンとを比較すれば、上記のことを一層はつきり理解できるだろう。ガスト

マンはすべて単なる気まぐれから、あるいはそのときの偶然の気分で、行動していく。首尾一貫して悪を追求しているのではなく、気分次第であるときは善なる事柄を行い、別のときには悪しき事柄を行っていく。そして、デュレンマット自身の代弁者とも考えられる作品中の登場人物によって<sup>7</sup>、ニヒリストと名づけられる。このようにガストマンは偶然や気分以身を委ねてしまっている以上、ベルラッハと違い、方法論的合理主義の立場に立つとは言えないのである。このことはさらに、デュレンマット自身の立場の吟味に直接つながっていく。というのは、少なからぬ解釈者が、デュレンマットはニヒリストではない、と言っている<sup>8</sup>。つまり、デュレンマットの立場はガストマンの立場とは異なるのである。これはすなわち、デュレンマットは非合理主義者ではないということになる。なるほど、デュレンマットの中に非合理的な要素を認める部分があることは間違いない。しかし、非合理的なものに身を委ねることがデュレンマットにとって重要なことではないのである。

このように見てくると、今度はデュレンマットの作家としての活動もよりよく理解できることになる。デュレンマットはしばしば非合理的な事柄に言及するとはいえ、様々な道徳的問題、例えば集団的責任等々を主題化している。このことは、方法論的合理主義の枠組みでのみ、理解できることと思われる。方法論的合理主義は、デュレンマットの作品における合理的要素と非合理的要素に相応の位置を与えるのみならず、デュレンマットがなぜ著作活動を続けたかという問題にも光を当てるのである<sup>9</sup>。

#### 4 合理的コンセプトへの最小限の期待

こうしてデュレンマット解釈に対する新しい枠組みを手に入れたわけだが、この枠組みを使えば、世界における合理的なものを本当に手にすることができるのだろうか。ある程度は合理的なものを手にできるとデュレンマットは確信していたのだろうか。非合理的なものに満ちた世界の中で合理的なものを見つけようと努力するにしても、合理的なものを捉えられるということを約束するものは何もない。わずかでも世界を合理的に捉えたり理解したりすることを期待してよいのだろうか。最後にこの問題を簡潔に吟味してみたい。

ここで、デイヴィドソンの「根源的解釈」の試みを考慮に入れたい。デイヴィドソンやクワインは、フィールド言語学者が未知の言語を自分たちの母語へどう翻訳するかに関して、思考実験を行っている<sup>10</sup>。その際、研究者は「寛容の原則」に従うという。これは、未知の言語の話者が発言することは正しい（真だ）と理解しなければならないというものである。少なくとも、最初はそうに理解しなければならないという。また、我々が真だと見なすものと、未知の言語の話者が真だと見なすものとの多くが重なるはずだという。つまり、すべてを疑ってしまえば、発話者が嘘を言っているのかどうか、あるいはいつ嘘を言っているのかが、まったくわからないことになってしまう。未知の言語の話者の語ることの多くが正しいと考えているときのみ、ある発言が誤っていると確信できるのである。理論的には、ある社会の思考様式が我々のものと徹底的に異なるということは、考えることが可能であろう。が、異なっていることを異なっていると認識するためには、多くの共

通の事柄を持っているのでなければならないのである。同様に、我々はすべてのものを同時に疑うことはできないであろう。そのようなことをしてしまえば、何かを疑い得ない確かなものと見なす基準がなくなってしまうからである。このような考えからは、「反」相対主義が帰結することになる。相対主義とは、例えばすべての社会、すべての文化がそれぞれ固有の世界観や価値観を持ち、異なる文化間の人間はお互いを理解できないという考えであろう。ところが、上述のことから帰結するのは、我々は相応の努力を行えば、異文化や異社会を、あるいは異文化や異文化の人々の発言を相対的によく理解できる、ということである。この考えは、完全な非合理主義から離れ、ある種の合理主義に近づいていくものである。

ある種の合理主義が基礎にあれば、世界をある程度理解しようという希望を葬る必要はないということになるだろう。とすれば、ベルラッハの努力、換言すれば方法論的合理主義の努力も無駄ではない、とデュレンマットが信じていた、と考えることもできるだろう。すなわち、自らの作家としての活動も無益なものでない、とデュレンマットは考えていたに違いないのである<sup>11</sup>。

## おわりに

根源的解釈の理論があらゆる反論をはねつけることができるものだ、とここで主張されているわけではない。デュレンマットが意識的に根源的解釈の立場をとった、と言っているわけでもない。しかし、無意識であっても、デュレンマットは根源的解釈に類似した考えを持っていたと思われる。そうでなければ、デュレンマットの作品やデュレンマットの作家として活動を統一的に理解することができないのである。

本稿の主張はこうである。方法論的合理主義をデュレンマット解釈の枠組みにし、根源的解釈のような理論を根底に据えれば、デュレンマットの作品、そしてデュレンマットの作家としての活動を統一的に捉えることができる。この主張は、デュレンマットについての解釈が相反する方向に引き裂かれている状況に鑑みれば、それなりに意味のあるものであろう。

<sup>1</sup> 例えば、以下のものを参照せよ。Marcel Reich-Ranicki, *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 30.11.1985.

<sup>2</sup> 例えば、下記の版の *Richter und sein Henker* の付録 (Anhang) に収められている様々な新聞の書評、文学者や哲学者の諸論文を見れば、いかに激しい論争が繰り広げられたのかがよくわかる。Friedrich Dürrenmatt, *Der Richter und sein Henker*, Diogenes Verlag, Zürich, 1985.

<sup>3</sup> ここでの非合理主義的解釈について、そして推理小説の合理的世界観の限界等については、下記のものに多くを負っている。Peter Rüedi, "Requiem auf den Kriminalroman", aus Anhang zu *Der Richter und sein Henker*., Ernst Bloch, "Philosophische Ansicht des Detektivromans", in *Der Kriminalroman II Zur Theorie und Geschichte einer Gattung*, Hrsg. Jochen Vogt, Wilhelm Fink Verlag, München, 1971.

<sup>4</sup> Kenneth S. Whitton, *Dürrenmatt: Reinterpretation in Retrospect*, St. Martin's Press, 1990, *The Theatre of Friedrich Dürrenmatt: A Study in the Possibility of Freedom*, Humanities Press, 1980

<sup>5</sup> この概念自体は H.Schnädelbach から借りてきている。ただし、Schnädelbach はこの概念を非合理主義の分類に使ったにすぎない。下記のものを参照せよ。H. Schnädelbach, „Über Irrationalität und Irrationalismus“, in H. Schnädelbach, *Vernunft und Geschichte*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1987.



6 少なからぬ思想家がこの概念を使用しているが、特に下記のことを参照せよ。Hartmut Böhme, Gernot Böhme, *Das Andere der Vernunft, Zur Entwicklung von Rationalitätsstrukturen am Beispiel Kants*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1983.

7 *Richter und sein Henker* は1976年に映画化されたが、その際フリードリヒ・デュレンマット自身が台本を書き、わざわざフリードリヒという名で作家の役を演じている。それゆえ、映画の登場人物フリードリヒが現実のデュレンマットの考え（の少なくとも一部）を代弁していると考えられることでもできるだろう。Maximilian Schnell(Regie), *Der Richter und sein Henker*, MFG-Film, 1976.

8 例えば、下記のことを参照せよ。F.X. Augustin, vgl. <http://goethe.de/ins/vn/han/kue/the/de2002252.htm>

9 ここでは *Richter und sein Henker* を中心に論じているが、その続編においても、あるいは *Panne* 等の作品においても、類似のテーマが取り上げられていた。つまり世界が偶然的なもので、完全に合理的に理解することはできないものであることが何度も主題化されている。デュレンマット自身、世界が absurd なものであることは知っていると言っている。また、絶望しながらもろもろの作品を書いているのではないとも語っている（上述の Anhang に収められた新聞書評を参照せよ。Der Tag, Berlin, 5.4.1953, Rundschau, Köln, 14.12.1953, in Friedrich Dürrenmatt, *op.cit.*, S.128, S.130.）。それゆえ、方法論的合理主義及び根源的解釈の理論は *Richter und sein Henker* のみならず、デュレンマットの他の作品群、デュレンマットの作家としての活動そのものに（ある程度の説得力を持って）応用できるように思われる。

10 この部分の議論については下記のことを参照せよ。W.V.O.Quine, *Word and Object*, 1960, M.I.T.Press, Chap.2. D.Davidson, *Inquiries Into Truth and Interpretation*, 1984, Oxford.

11 上述の注9を参照せよ。

## Is Friedrich Dürrenmatt an Irrationalist?

Shogo ASAMI \*

---

This thesis aims to propose a new framework to interpret the works of the Swiss author and dramatist, Friedrich Dürrenmatt (1921-1990). After underscoring the limitations of the two main ways of interpreting his works, the rational and irrational perspectives, a third way known as Methodological Rationalism is outlined. The author contends that this will lead to an integration of the contradictions inherent in the previous two ways of interpreting Dürrenmatt's world. Adopting a linguistic-philosophical point of view through a Methodological Rationalist approach, will enable us to not only understand Dürrenmatt's works, but also his activities with greater clarity.

**Key words:** Dürrenmatt, Rationalism, Irrationalism, Methodological Rationalism, *Richter und sein Henker (The Judge and His Hangman)*

---

---

\* A visiting member of the Institute of Human Sciences at Toyo University